



星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2013年07月18日

教師時代の作品群 (1)～(6)

(1)

稗貫郡立稗貫農学校の教師時代は、生徒とのふれあいを通じて、様々な刺激を受けるだけでなく、自らも授業中に作品を披露するなど、直接に反応を得るような場でもあった。このことは、作品を書かせる契機になったといっても過言ではないだろう。

この教師時代に書かれた、星や月が現れる作品のひとつが「月夜のでんしんばしら」である。主人公の少年、恭一が、鉄道線路の横を歩いていると、突然、その線路に沿って並び立っている電信柱が「ドッテドッテテ、ドッテド」というリズムカルな歌と共に一斉に行進を始めるという童話だ。

「九日の月がそらにかかっていた。」

とあるので、上弦を過ぎた月夜である。この月は夜半には沈むので、少年が夜歩くとすると夜半前が普通だ、というシチュエーションとも一致する。ときどき、うるこ雲にかくされながら、月明かりの中を何万という電信柱が歩く様子が描かれている。様々な形態の電信柱や、またそれに号令をかける電気総長に出会う。電気総長は、イギリスとスコットランドの間で交わされた英語の電文を披露する。そして、汽車がやってきてあわてて行軍を辞めて、再び固定された電信柱の風景に戻ると言う話である。

私自身は、この作品に強い印象を持った覚えがある。私が幼い頃に住んでいた家は、会津若松駅のすぐ南側だった。電信柱の列こそなかったが、駅周辺には高い鉄塔が夜でも明るい照明がついていて、それが堂々と歩き出しそうに思えたからだ。夜、その鉄塔が同じ場所にあるかどうか、こわごわ

部屋のカーテンを開けて見ていた覚えがある。

この童話は、賢治の興味と時代背景がミックスされてできあがった作品と言える。この連載のはじめに紹介したように、賢治はもともと理科少年であった。そのため、電信柱に象徴される電気、通信、そして汽車などにも強い興味を抱いていた。童話のフィールドとして、線路脇を選ぶというのは、その興味に基づいている。明治から大正にかけて、地方にも電気が急速に普及していった影響も大きい。さらに電信柱を兵隊の行進に見立てるところは、日露戦争から第一次世界大戦を経て、日本軍は連勝しており、国民の中にも、その地位が認められていたという時代背景も無視できない。

特に、この作品に後年の「銀河鉄道の夜」の物語パターンを読み取ることができることには注目したい。現実から入り、夢のような体験を経て、再び現実に戻るという基本パターンが、すでにこの作品で採用されているのである。



(2)

農学校の教師時代に書かれた作品に、「東岩手火山」という詩がある。もともと、この作品は岩手毎日新聞に大正十二年（1923年）に「心象スケッチ外輪山」という題で発表され、その後、「春と修羅」に納められて出版された。生徒たちと一緒に岩手山に登り、夜明け前の外輪山に到着した時の情景を描いた200行を超える長大な詩で、まず月の表現から始まる。

月は水銀、後夜（ごや）の喪主

この冒頭に現れる月の色の表現に、まず注意したい。この登山は大正十一年九月十八日早朝に実施されている。この朝の月齢はほぼ26なので、かなり細い月が午前1時30分頃に上ってきたはずだ。この時期は平地ではまだ暖かさが残る季節なので、地平線に近い月は黄色みがかって見えることが多いのだが、水銀のように金属的な色ということは、かなり白く輝いていたのだろう。おそらく、岩手山の清涼な大気を反映しているに違いない。ちなみに、「後夜」とは、一日を六つに分けたときの言い方（晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜）で、夜の最後、つまり丑三つ時あたりから夜明けにかけてを示す言葉である。

このような細い月の場合、影の部分がほのかに輝いて見えることが多い。これは地球からの太陽光の反射が月の影の部分を照らし出しているもので、「地球照」と呼ばれるが、賢治は、すでにその言葉をものにしていて、詩の中程に

月の半分は赤銅 地球照（アースシャイン）

と表現している。これは以前も紹介した「肉眼に見える星の研究」（吉田源治郎著）の中で学んだと思われる。ちなみに地球照が赤銅色に見えることはない。月の明るい部分が水銀のようだったので、対比として表現したか、あるいはそのように思えたのだろう。

星や星座についての表現もたくさん出てくる。

さうさう、北はこつちです
北斗七星は
いま山の下の方に落ちてゐますが
北斗星はあれです
それは小熊座といふ
あの七つの中なのです

この表現の前に、賢治が生徒に時刻を聞く場面があり、その答えは3時40分であった。その時刻の北斗七星を計算してみると、ちょうど北北東から上ってくる位置にある。柄杓の部分は20度ほどの高さになっているが、柄の部分はまだ低いので、山の端にかかっている見えないのだろう。もちろん、北斗星（北極星）は高いので、それを含め、こぐま座の7つの星でつくる小柄杓は見えているようだ。この時刻にはかなり高く上ったオリオン座も何度も出てくる。

例えば

オリオン 金牛 もろもろの星座
澄み切り澄みわたつて
瞬きさへもすくなく
わたくしの額の上にかがやき
さうだ オリオンの右肩から
ほんたうに鋼青の壮麗が
ふるへて私にやつて来る

オリオン座と、その右上のおうし座とは、いまにも取っ組み合うかのような形で星座絵に描かれるが、金牛とはそのおうし座である。「瞬きさへも少なく」というのは、ほとんど風もなく、星の瞬きがない絶好の条件だったに違いない。

オリオン座の星座絵としての右肩（われわれから見ると左側になるのだが）には赤色の一等星ベテルギウスが輝いている。この右肩から「ほんたうに鋼青の壮麗が」やってくるという表現は、極めてユニークだ。鋼青という表現は、賢治は空に対してよく使っている。一般に賢治の造語とされているが、「宮澤賢治と星」（草下英明著）によれば英語の Steel Blue の訳であるという。

いずれにしる、青みを帯びた鋼色という意味なのだろうが、私は夜明け前の夜空が次第に青みを帯びた昼の色に変化していく時の表現として、とても納得した。天文学的には、天文薄明から常用薄明にいたるわずかな時間帯、漆黒の夜が次第に明るくなる時、地平線近くは赤みを帯びて、朝焼けになるが、もっと空の高い部分は、やや青みを帯びながら明るくなっていくのである。一晩中、星を眺めた末に、夜明けを迎えたことのある人なら理解できるに違いない。

この詩からは、賢治が生徒とのやりとりで星座を教えるのを楽しみながらも、自らその素晴らしい星空を味わっていたことがわかる。当時は、光害など皆無であったはずだし、天の川もはっきり見えていたはずだ。

火口丘の上には天の川の小さな爆発

この時刻には、北西にはくちょう座が沈み、そこからカシオペヤ座にかけての秋の天の川が見えていたはずで、それがこの表現につながっているのだろう。

こうしているうちに、山頂を目指す時刻がやってくる。本格的な夜明けになると、星は消え、月の存在感も失われる。この詩の最後は、その情景を賢治らしい表現で締めくくっている。

※なお、この詩全体の解釈・解説は中央大学文学部名誉教授の渡部芳紀氏のページ (<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~houki/kenji/higashiiwatekazan.htm>) が詳しい。

(3)

夜間登山でのリアルな夜の風景の中で、生徒たちとのやりとりを描いた「東岩手火山」という詩は、月に始まり、月で終わっている。同様に月が脇役ながらも、全編にわたって、ひとつの筋となっている童話が、初期の作品「かしわばやしの夜」である。妙な絵描き（原文：画かき）と共に、柏の林に入り込んで、不思議な体験をする物語は、現実からひょいと夢物語に入り、そして最後に現実に戻るといふ、賢治独特のパターンに沿っているだけでなく、星や宇宙への思いや体験の片鱗が見え隠れする作品だ。

冒頭、主人公の清作が絵描きと出会い、挨拶をするところでは、

「えつ、今晚は。よいお晩でございます。えつ。お空はこれから銀のきな粉でまぶされます。ごめんなさい。」

と、銀のきな粉という表現で、満天の星空を表現する。そして、柏の林に入り込んだ方がいいが、清作は招かざる客として柏の木大王と口論を始める。月が登場するのは、その最中、絵描きが仲裁に入るシーンからである。

「おいおい、喧嘩はよせ。まん円い大将に笑はれるぞ。」

見ると東のとつぶりとした青い山脈の上に、大きなやさしい桃いろの月がのぼつたのでした。お月さまのちかくはうすい緑いろになつて、柏の若い木はみな、まるで飛びあがるやうに両手をそつちへ出して叫びました。

「おつきさん、おつきさん、おつきさん、
ついお見外（みそ）れして すみません
あんまりおなりが ちがふので
ついお見外（みそ）れして すみません。」

こうして、賢治は「桃いろ」の月の光に独特の力を与えている。そして、柏の木大王も歌い出すのだが、そこに描かれる月の色は、最初に「ときいろ」、そしてやがて「みづいろ」になる。これは月の出直後の月が、夕日と同じように赤みを帯びているのに、高度が高くなって次第に赤みが失せていく様子である。

その後、物語が進むにつれ、要所要所に月を登場させている。その記述は、以後実に13回。月の光は、「ぱつと青く」なったり、「なんだか白つぽくな」ったり、「青くすきとほ」ったり、「すこし緑いろにな」ったり、再び「青くすきとほつてそこらは湖の底のやうにな」ったり、「真珠のやうにな」ったりしていく。物語の最後は、「月はもう青白い霧にかくされてしまつてぼおつと円く見えるだけ」となる。

一晩中、星空のもとで過ごした人は経験があるに違いないが、実際、夜明け前は大気が冷えて霧が出ることもある。そんな夜明け前の霧に、月も星も隠される様子を賢治はよく知っていたに違いない、と思わせるラストである。

いずれにしる、賢治はこの作品の全体の物語のリズムを、このように月の光に関する記述をいれな

がら整えようとしていたのである。



(4)

教師時代の作品の一つに、賢治にしては珍しく軍隊を取り上げた作品がある。「鳥の北斗七星」である。この作品は、鳥の群れを軍隊に、その鳴き声を大砲になぞらえ、その仲間同士あるいは恋人とのやりとりをまじえつつ、軍隊としての訓練や敵の山鳥の殺戮シーンなどがあるため、戦後になって作品集「注文の多い料理店」から全文が削除されたことがある。さらに言えば、賢治作品の特徴である現実から夢の世界へ、そして再び現実に戻るというパターンからも外れており、最初から現実を超越した空想世界を最後まで貫き通している。

ただ、その幻想世界でもさらに高次元な幻想世界へと入り込む部分があることがわかる。鳥の軍隊が営舎へ戻って、深夜になる下記のシーンだ。

「雲がすっかり消えて、新らしく灼かれた鋼の空に、つめたいつめたい光がみなぎり、小さな星がいくつか聯合して爆発をやり、水車の心棒がキイキイ云ひます。

たうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅（ひび）がはひつて、まつ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、鳥を握んで空の天井の向ふ側へ持つて行かうとします。鳥の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引をはいて一生けん命宙をかけめぐります。兄貴の鳥も弟をかばふ暇がなく、恋人同志もたびたびひどくぶつつかり合ひます。

いや、ちがひました。

さうぢやありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登つてきたのです。そこで鳥の軍隊はもうすっかり安心してしまひました。」

恒星が張り付いている天球という概念が、まだ現実感を持っている時代のように、この天球の向こう側へ連れ去ろうとする地上世界を超越した存在と、それに抗う様子は、まるでギリシア神話の神の世界のようで、物語全体の幻想世界の中でも、さらに高次元といえるだろう。それが再び通常の世界へと戻るきっかけに月の出が使われている。月齢20ほどの月であれば、下弦に近いため、月の出は確かに深夜となる。

だが、この部分の全体に対する意味は一読しただけでは汲み取れない。この前に恋人と別れを示唆するシーンがあり、戦争という現場で死に向き合う時の感情を表現しているとも思えるが、難解なのは間違いない。

この作品に登場する、もうひとつの天体が題名にもある北斗七星である。もともと北斗七星は仏教でも北辰（北極星）妙見信仰ともあいまってあがめられていた星座でもあり、古くは死の象徴でもあった。ちなみに生の象徴は南斗六星（いて座の一部）である。賢治は、その意味を理解し、使っていた可能性がある。再び高次元の幻想世界に入り込むところでは、自らの死と、祈りの対象としての北斗七星が現れる。

「『おれはあした戦死するのだ。』 大尉は呟やきながら、許嫁（いひなづけ）のゐる杜の方にあたまを曲げました。

その昆布のやうな黒いなめらかな梢の中では、あの若い声のいゝ砲艦が、次から次といろいろな夢を見てゐるのでした。

烏の大尉とたゞ二人、ばたばた羽をならし、たびたび顔を見合せながら、青黒い夜の空を、どこまでもどこまでものぼつて行きました。もうマヂエル様と呼ぶ烏の北斗七星が、大きく近くなつて、その一つの星のなかに生えてゐる青じろい苹果（りんご）の木さへ、ありありと見えるころ、どうしたわけか二人とも、急にはねが石のやうにこはばつて、まつさかさまに落ちかゝりました。」

マヂエルというのは、おおぐま座の名称「Ursa Major」の後半の読みであるとされている。また、この作品自体が雪原の烏（白い雪の上の黒い烏）と天上の北斗七星（黒い夜空の輝く星）とを対峙させたものだという論考もある（『天上の雪原と地上の夜空に散りばめられた星々：宮沢賢治「烏の北斗七星」小考』、中井悠加、論叢国語教育学 no.復刊3 page.1-13） 確かに冒頭、雪原の烏を望遠鏡でのぞくシーンがあることから、その対比を賢治自身が意識していた可能性は大きい。

さて、その後、作品は山烏の殺戮、その遺骸を手厚く葬ろうとする時の思いの吐露につながっていき、そして銀河鉄道の夜の中でも示されるように、皆の幸せを求める賢治の心そのもののが、次のように映し出される。

「（あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません。）マヂエルの星が、ちやうど来てゐるあたりの青ぞらから、青いひかりがうらうらと湧きました。」

ふたつの世界大戦の間に書かれたという時代背景もあるが、この作品には賢治の思いが込められている。実際、続く太平洋戦争において、特攻隊員として沖縄で散った東大の経済学徒兵・佐々木八郎の手記には、「烏の北斗七星」が触れられている。

「しかし僕の気持はもっとヒューマニスティックなもの、宮沢賢治の烏と同じようなものなのだ。憎まないでいいものを憎みたくない、そんな気持なのだ。」（『きけわだつみのこえ』より）

星を生と死、そして永遠の時間、あるいは超越したものとして投射し続けた賢治の思いは、特に学徒動員されるような人たちには重く伝わっていたに違いない。

(5)

代表的な作品である「銀河鉄道の夜」もそうなのだが、賢治の作品には鉄道がしばしば登場する。自分が生まれ育ったところから、遠くの地へと連れて行ってくれる鉄道は、いつの時代でも憧れの対象になるのは当然かも知れない。賢治が生まれる頃は、花巻駅が日本鉄道（現・東北本線）の駅として開業して間もない頃だったし、岩手軽便鉄道（現・釜石線）の駅が、少し離れたところに開業したのは1913年（大正2年）、賢治17歳の頃である。その意味で、新たな鉄道の敷設が理科少年であった賢治に強い印象を与えていたことは間違いないだろう。

このふたつの鉄道は、当時は相互乗り入れはしていなかった。というのも、軽便鉄道の線路の幅は日本鉄道のように現在のJRで用いられている1067mm幅よりも狭く、乗り入れそのものができなかったのである。この事実は、賢治の作品「シグナルとシグナレス」を読むときのキーポイントとなる。「シグナルとシグナレス」は、1923年の5月11日から23日まで岩手毎日新聞に掲載された短編童話である。タイトルからもわかるように、「月夜のでんしんばしら」に続く、鉄道がメインの物語で、主人公はいまほとんど見られなくなった腕木式信号機だ。細長い木（腕木）が、その角度を変えることで列車の運転士に進行可か不可かを示す信号機である。おそらく日本鉄道側を意識した「本線の信号機シグナル」と、岩手軽便鉄道を意識した「軽便鉄道の腕木式信号機シグナレス」がお互いに想いを抱きながら、会話する様子が描写されている。シグナレスの方が女性なのは、軽便鉄道の腕木式信号機が小さかったからであろう。

この作品にも星に関する描写が冒頭の詩から登場する。

「ガタンコガタンコ、シュウフッフツ、
さそりの赤眼が 見えたころ、
四時から今朝も やって来た。
遠野の盆地は まっくらで、
つめたい水の 声ばかり。（略）」

と、蒸気機関車がやってくる描写に、さそり座のアンタレスが登場する。さそり座が朝4時頃に見えるのは冬から初春にかけてだ。凍てつくという表現も使われているので、まさに寒い季節なのだろう。ふたりの最初の会話には、二つの鉄道の格の差が表現されている。「お早う今朝は暖かですね」と本線のシグナルが声をかけると、シグナレスは伏し目になって「お早うございます」とだけ答えるのだが、その直後にシグナルは太い電信柱に次のように諭される。

「若さま、いけません。これからはあんなものにやたらに声を、おかけなさないようにねがいます」

規模も小さく、東京ともつながっていない岩手軽便鉄道に対して見下している意図が込められている。このあたりも二つの鉄道の差について認識していないと理解できない。そして、その格の差を乗り越え、時にはすれ違いながらも、二人が愛を誓い合うところまでが描かれている。このあたりは当時のような格差が目立った社会の中での恋愛を意識してのことかも知れない。前半のクライマックスは、結婚の約束を取り交わすところだろう。シグナルは「春になったら燕にたのんで、みんなにも知らせて結婚の式をあげましょう。」と言う。以下、シグナレスとの会話である。

「だってあたしはこんなつまらないんですわ」
「わかってますよ。僕にはそのつまらないところが尊いんです」
すると、さあ、シグナレスはあらんかぎりの勇気を出して言い出しました。
「でもあなたは金でできてるでしょう。新式でしょう。赤青眼鏡を二組みも持っていらっしゃるわ、夜も電燈でしょう。あたしは夜だってランプですわ、眼鏡もただ一つきり、それに木ですわ」
「わかってますよ。だから僕はすきなんです」

そしてシグナルは、星をプレゼントする。

「結婚指環をあげますよ、そら、ね、あすこの四つならんだ青い星ね」
「ええ」
「あのいちばん下の脚もとに小さな環が見えるでしょう、環状星雲（フィッシュマウスネビュラ）ですよ。あの光の環ね、あれを受け取ってください。僕のまごころです」
「ええ。ありがとう、いただきますわ」

天文ファンならご存じの、こと座のM57環状星雲である。リング状なので、指輪に見立てたのだが、ルビのフィッシュマウスネビュラは当時の英語の通称である。後半では、二人の結婚に大反対する電信柱によって、辛い時を過ごしながら、想いを空へと馳せ、それが祈りへとつながっていく。

「ああ、シグナレスさん、僕たちたった二人だけ、遠くの遠くのみんなのいないところに行ってしまうたいね」

「ええ、あたし行けさえするなら、どこへでも行きますわ」

「ねえ、ずうっとずうっと天上にあの僕たちの婚約指環よりも、もっと天上に青い小さな小さな火が見えるでしょう。そら、ね、あすこは遠いですねえ」

「ええ」シグナレスは小さな唇で、いまにもその火にキッスしたように空を見あげていました。

(中略)

「ああ、お星さま、遠くの青いお星さま、どうか私どもをとってください。ああなさけぶかいサンタマリヤ、まためぐみふかいジョウジ スチブンソンさま、どうか私どものかなしい祈りを聞いてください」

「ええ」

「さあいっしょに祈りましょう」

ちなみにスチブンソンというのは、蒸気機関を利用し、実用的な鉄道を作った「鉄道の父」と呼ばれるイギリス人の名前だ。このあたりが賢治の博識とユニークさとも言える。最後は、二人の仲を取り持とうとして、かえって電信柱を起こらせてしまった倉庫氏が霧に包まれ、お互いに顔が見えないふたりにおまじないをかけて、宇宙へ行く夢を叶えさせてあげるのだ。

「そうか、ではおれが見えるようにしてやろう。いいか、おれのあとについて二人いっしょにまねをするんだぜ」

「ええ」

「そうか。ではアルファー」

「アルファー」

「ピーター」 「ピーター」

「ガムマー」 「ガムマーアー」

「デルター」 「デルターアアアア」

実に不思議です。いつかシグナルとシグナレスとの二人は、まっ黒な夜の中に肩をならべて立っていました。

こうして、宇宙の中で、ピタゴラス派の天球運動の諧音を聞いたり、地球を眺めたりして二人肩を並べるのだ。

「ええ、とうとう、僕たち二人きりですね」

「まあ、青白い火が燃えてますわ。まあ地面と海も。けど熱くないわ」

「ここは空ですよ。これは星の中の霧の火ですよ。僕たちのねがいがかかったんです。ああ、さんたまりや」

「ああ」

「地球は遠いですね」

「ええ」

冒頭から現実離れた夢の世界そのものが舞台となっているのは、賢治作品の中では直球勝負の童話らしい童話とも言える。しかし、さらにその上の幻想世界へと飛躍するパターンは、賢治作品の特徴といえるだろう。

そして、その幻想世界へ飛翔するときのおまじないは、星の名前に付けられているバイエル名。ドイツの天文学者ヨハン・バイエルが1603年に『ウラノメトリア』星表で命名したもので、各星座の恒星を明るい順にギリシア文字のアルファベットを当てはめたものである。 α 、 β 、 γ 、 δ という

名前は、星の世界に魅惑された天文少年であれば、だれでも一度は声に出して、そのエキゾチックな音感に心奪われたことがあるに違いない。賢治も少年時代、初めてであったアルファ、ベータ、ガンマ、デルタと声に出しながら、宇宙への空想を膨らませたことが、この作品から読み取れるのである。

(6)

教師時代の作品の中で、雑誌に掲載された唯一の作品が「雪渡り」である。

1921年12月および1922年1月の『愛国婦人』に掲載され、原稿料5円を手にしたという。賢治らしい幻想的な作品のひとつで、人間の子供たちと子狐たちの交流が狐の幻燈会（映画の上映会のようなもの）を軸に展開されている。まずは賢治の地元にも伝わる雪の表現で始まる。

雪がすっかり凍って大理石よりも堅くなり、空も冷たい滑らかな青い石の板で出来てあるらしいのです。

「堅（かた）雪かんこ、しみ雪しんこ。」

お日様がまっ白に燃えて百合ゆりの匂にほひを撒まきちらし又雪をざらざら照らしました。

木なんかみんなザラメを掛けたやうに霜でぴかぴかしてゐます。

「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」

凍った雪が大理石よりも硬くなることはないものの、地上の雪を白い大理石に、青い空を青い石と表現するところは、「石っこ賢さん」の本領である。そして、キーワードとしての「堅雪かんこ、凍み雪しんこ」が繰り返される。これは元々、賢治の故郷にあったわらべ歌で、雪が固くなった様子を表現している。

雪国の経験がある人なら、新雪はずぶずぶと足がもぐってしまい、とても歩きにくいですが、しばらくして固まると歩きやすくなることを経験的に知っているだろう。

その後、子狐と出会った主人公の子供たちのやりとりがはじまる。狐が人をだますなど濡れ衣だと主張する子狐は子供たちを幻燈会に誘う。そして第二部、十五夜に幻燈会へと出かけることになる。

青白い大きな十五夜のお月様がしづかに氷の上山から登りました。

雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒水石（かんすゐせき）のやうに堅く凍りました。

ここでも固い雪を石に喩えている。寒水石とは、茨城県で採取されるもので、いささか変成されたために、白色から緑灰色の縞模様になっている大理石の一種である。そして、

今夜は美しい天気です。お月様はまるで真珠のお皿です。お星さまは野原の露がキラキラ固まったやうです。さて只今ただいまから幻燈会をやります。みなさんは瞬きやくしゃみをしないで目をまんまろに開いて見てみて下さい。

という子狐の開会の挨拶があり、幻燈会が始まる。そして、そこで大人たちの醜態が映写される。主人公の四郎も狐を信用し始め、出されたものもおいしく食べ、子狐たちも信用してもらえた事で嬉しくなる。

狐の学校生徒はもうあんまり悦んでみんな踊りあがってしまひました。

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり、

たとへからだを、さかれても

狐の生徒はうそ云ふな。」

キック、キックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとへこぶえて倒れても

狐の生徒はぬすまない。」

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のひかり

よるはツンツン月あかり

たとへからだがちぎれても

狐の生徒はそねまない。」

どんな時でも嘘はつかず、盗まず、そねまないという歌を歌って喜ぶ様子が描写される。最後に子狐の閉会の言葉が、

「今夜みなさんは深く心に留めなければならないことがあります。それは狐のこしらへたものを賢いすこしも酔はない人間のお子さんが喰べて 下すったといふ事です。そこでみなさんはこれからも、大人になってもうそを つかず人をそねまず私共狐の今迄いままでの悪い評判をすっかり無くしてしまふだらうと思ひます。閉会の辞です。」

である。狐とわらべ歌から着想を得た賢治らしい幻想の世界である。賢治作品独特の幻想世界から一段高い世界への飛躍がない、珍しい物語ではある。人間の大人たちの嘘を通じて、狐と人間の子供が信頼関係で結ばれるという設定は、自己犠牲や皆の幸せを前面に出すことの多い賢治作品の中ではインパクトは大きくはないかもしれない。

この作品は教師になった月に発行されているので、その執筆そのものは教師になる前の東京時代、つまり国柱会に居るときに書かれたと考えられる。国柱会の教えを文章で広めたいと思っていたこと、また当時の親戚に「書いたものを売ろうとしている」旨の手紙を送っていたことから、自ら編集部を持ち込んだことが窺える。

そして、持ち込み先にこそ、賢治の心が現れていると私は思う。というのも、この『愛国婦人』は、賢治の母親が会員であった愛国婦人会が発行していた雑誌だからだ。故郷を離れ、国柱会に飛び込んだのはいいが、それは家族に断りなしのことだった。そうはいっても、自分が活躍している姿を見て欲しい、と思ったのではないだろうか。事情があって、その後、故郷に帰らざるを得なくなるものの、そういった姿を見せる場として、母親が目にするであろう『愛国婦人』を選んだところに、賢治の気持ちが垣間見えるのである。

なお、賢治は発表された作品を切り抜いて、そこに推敲を加えていたことが知られている。あくまで作品を良くしようという賢治の精神の現れだろう。ちなみに、これだけの作品を生み出しながら、まともな原稿料を手にしたことは極めて少なく、特に雑誌への掲載では、この作品が唯一ともいわれているのは、まさに歴史の皮肉である。